

## 肝臓病の検査について

はじめに…慢性肝疾患では定期的な検査が必要になります。定期的な検査によって、早期に肝細胞癌が検出されることが治療につながり、予後改善効果に繋がる可能性があります。今回はよく施行される画像検査を中心に解説します。

### 腹部超音波検査

**最も簡便な検査です。**超音波を使用して肝臓等を観察します。身体への侵襲性が少ない安全性が高い検査であるため、頻回に検査することが可能であり、肝臓癌の早期発見へと繋がります。デメリットとしては、骨や体型により死角が発生するため、超音波検査では見えずらい箇所があります。そのため、CT検査、MRI検査等の他の画像検査を併用します。**造影超音波検査では超音波用の安全性の高い造影剤を使用します。**腫瘍の血流パターンや造影剤の取り込みの周囲との違いにより、より詳しい診断が可能となります。他に超音波エラストグラフィという超音波検査があり、特殊な音波を使用する事で、肝臓の硬さの指標を得ることが出来ます。

### CT検査

CT検査では、身体を全方向からX線により撮影し、コンピューターにて断面像を作成します。超音波検査法と比較して死角が少なく、より客観的に観察できる利点があります。また、MRIと比較して短時間で撮影可能です。デメリットはX線を使用することです。CT検査では造影剤を使用する事で、より正確な診断が可能となります。ただしヨードアレルギー、腎機能低下などCT用の造影剤が使用できない方がおり、注意が必要です。画像は血管や腫瘍を三次元画像に再構築出来、位置関係などの把握に有用です。

### MRI検査

MRI検査では、磁気を利用した画像により人体の断面像を作成します。MRI用の鉄剤を含む造影剤を使用することで、肝臓の腫瘍の良悪性の鑑別診断にも役立ちます。鉄は正常肝では組織中のクッパー細胞に取り込まれますが、悪性腫瘍内ではクッパー細胞が少なく鉄の取り込みが少なくなります。この原理を腫瘍の良悪性の鑑別診断に利用します。副作用はほとんどありませんが、磁気を利用する為に、身体の中に金属が埋め込まれている場合は、MRIは出来ません。例えば心臓のペースメーカー、脳動脈クリップなどです。

### 血管造影検査

肝動脈から造影剤を注入することにより、肝臓や周辺の血管の血流状態を観察する検査です。肝臓癌の診断と治療に用いられます。肝臓癌は血流が豊富な腫瘍であり、血管造影とCT検査の組み合わせより、肝臓癌がより鋭敏に描出されます。抗がん剤や塞栓物質を注入するなど治療にも利用されます。

### 肝生検

肝臓の組織の一部を取って、顕微鏡下に病理組織を見る検査です。肝臓病の診断の最も信頼性の高い基準となる検査です。腫瘍の良悪性の鑑別が必要な方、特殊な肝炎など、必要な場合に依って検査します。

### まとめ

B型肝炎、C型肝炎、肝硬変がある場合は、定期的に検査をする事が大切です。定期的な検査が、肝臓の早期発見および治療に繋がります。

文責 澁谷友美

